

日本家庭科教育学会 2022（令和4）年度例会 プログラム

2022年12月4日（日）

13：30～16：00

オンライン開催

【日 程】

開会

13：30 開会の辞
会長挨拶

シンポジウム

13：40 シンポジスト紹介
(コーディネーター 工藤 由貴子 氏)

13：45 石井 克枝 氏

14：05 叶内 茜 氏

14：25 渡瀬 典子 氏

(休憩 14：45～15：00)

15：00～16：00 ディスカッション・質疑応答

閉会

16：00 閉会の辞

【シンポジウム】

2021年12月4日（日）13：30～15：45 オンライン

テーマ： ウィズコロナ時代の家庭科教育

—家庭科における実践・体験の意義を問い直す—

趣旨

新学習指導要領改訂に基づく新しい時代の家庭科教育が展開されている。「より良い生活をつくる」ことを目指す家庭科にとって、実践的・体験的な活動は欠くことのできない重要な部分を占めており、子どもたちの資質能力獲得に果たす教育的意義は大きい。

一方で、調理実習や被服製作は家庭内の些末なことという誤解のもとで、家庭科に対する十分な理解が妨げられていることも事実である。家庭科が行う実践的・体験的な活動の意義、教育効果についてのエビデンスを示し、広く共有していくことが重要である。

特にウィズコロナの時代において、実践的・体験的活動は様々な制約を受け一方で、テクノロジーとの共存による新たな可能性も見出されている。どのような時代にも人間にとって譲れない体験とは何か、教室での日々の学びに、より一層の価値を与え、新たな知識やスキルを開発する機会となるような活動とはどのようなものか、家庭科の様々な分野での実践的・体験的活動を研究している3名のシンポジストにご登壇いただき、家庭科の実践的・体験的活動の再検討、意義づけを行ってみたい。

シンポジスト

石井 克枝 氏 千葉大学名誉教授、ZKK 副会長

叶内 茜 氏 川村学園女子大学講師

渡瀬 典子 氏 東京学芸大学准教授

コーディネーター

工藤 由貴子氏 和洋女子大学総合研究機構家庭科教育研究所

シンポジストのプロフィールと報告内容

石井 克枝 氏

プロフィール

お茶の水女子大学大学院家政学研究科修士課程修了。博士（農学）。大妻女子大学家政学部、福島大学教育学部、千葉大学教育学部を歴任し、家庭科教員養成に関わる。2015年千葉大学を定年退職し、千葉大学名誉教授。現在、淑徳大学非常勤講師。1999年、2009年告示高等学校学習指導要領に作成協力者として関わる。

報告内容

家庭科の学習の中で調理実習は児童・生徒が楽しみにして学んでいる。1958年に学習指導要領が示され、実践的・体験的な学習として調理実習は位置づけられ、施設設備の実態からグループで学習することが想定されてきた。調理実習の授業については早くから教育的価値について議論になり、1970年代には村田泰彦氏が技能習得だけを目的とする伝承的授業を問題にし、生活の科学的な認識を関連させることを提唱し、2010年代には河村美穂氏がその教育的意義に迫っている。また、児童・生徒の生活実態が変化し、授業時間も少なく、技能習得と生活の科学的認識にどう迫ることができるのか研究され、調理実験、試しづくりなど様々な授業が提案されてきた。

コロナ禍で調理実習はもっとも制限された授業の一つであった。共同作業をしない、一緒に食べない、話をしないなど、これらの制限下で、様々な対応がみられた。①家庭で実習を行う、②少人数での実習、③教材を考えるなど、という取り組みが行われた。調理実習の歴史、ウィズコロナ時代の経験をふまえ、調理実習の教育的価値とそれに向けた授業の在り方について改めて考えてみたい。

叶内 茜 氏

プロフィール

女子栄養大学を卒業後、東京学芸大学大学院修士課程、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了。博士（教育学）。大学院在学中に小中高の家庭科非常勤講師を経て令和元年度より現職。家庭生活アドバイザー。専門は家庭科保育学習。現在は子育て支援やケアに関する研究を行っている。

報告内容

保育学習の一部として位置付けられているふれ合い体験の場では、生徒が考えたかかわり方を実践するだけの一方的なものではなく、双方の「かかわり合い」が大切だと考える。ふれ合い体験を通して、生徒が乳幼児やその保護者、さらには保育者等の幼い子どもをとりまく多様な人々とのかかわり合いから得られる学びの意義は大きい。他者とかかわり合うことは保育学習に限らず、地域の中で暮らす人々がともに社会をつくっていくうえでも大切なことである。

コロナ禍で多くの直接体験が制限されるなか、ふれ合い体験は従来の形での実施が難しくなった活動の一つといえる。そのような中で、学校現場では他者とのかかわり合いの機会を保障しようと、新しい形での乳幼児との交流の実践が蓄積されつつある。次世代を育む力を身に付けた市民を育てるために、いまの家庭科保育学習では何ができるのか考えていきたい。

渡瀬 典子 氏

プロフィール

お茶の水女子大学家政学部卒業後、静岡県立佐久間高等学校に勤務。その後、岩手大学教育学部准教授を経て、現職。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修了。博士（学術）。ライフスタイル形成や生活価値観醸成について研究関心があり、家庭科教育を通して見たこれらの事象について検討をしている。

報告内容

家庭科教育は自己と「人／もの」との「よりよいかかわり」について追究をする、という特徴がある。コロナ禍における生活では、「人／もの」とのかかわりが制約される環境に追い込まれ、私たちは改めて、「製作実習」を含む、実践的・体験的な学習の在り方について、考えさせられる場面に遭遇した。

以上の背景を踏まえつつ、本シンポジウムでは「製作実習」の捉えなおしについてライフスタイル形成や生活価値に焦点を当て、概観する。かつての社会では「ものがないから製作の仕方を学ぶ」という必要性があり、この点において学習意義があった。しかし、高度経済成長期以降、衣料品が数多く流通するようになったことで、衣料品の扱い方や製作実習に対する生活価値観の多様性が生じてきたといえる。家庭科の授業における「製作実習」は、学習者の生涯に渡る生活の中で、どのような役割を果たすことが期待されるのだろうか。改めて、これらの事柄について検討したい。